

各関係機関長 殿
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病虫害防除所長
(公印省略)

平成25年度農作物病虫害発生予察情報について

平成25年度農作物病虫害発生予報第14号を発表したので送付します。

平成25年度農作物病虫害発生予報第14号

平成26年3月3日
徳島県

I. 果樹
果樹共通

果樹カメムシ類

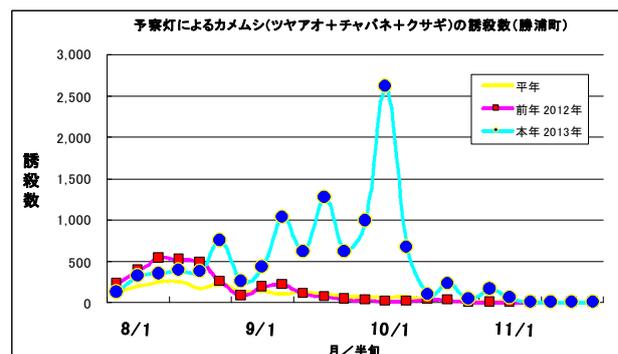
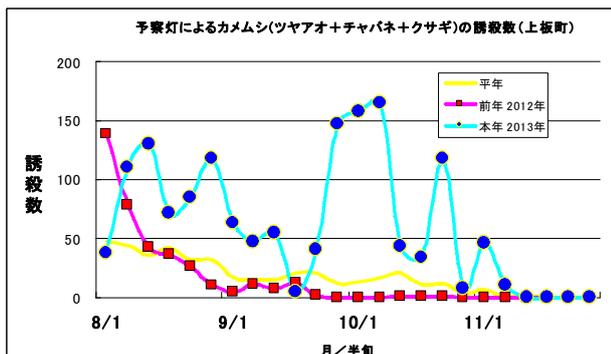
1) 予報内容

発生時期 平年よりやや早い

発生量 平年より多く(前年よりやや多い), 発生程度は「中～多」

2) 予報の根拠

(1) 上板町の予察灯誘殺数は8月以降平年より高めで推移し, また勝浦町でも9月以降平年より高めで推移した。



(2) 2月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査(11地点×2ヶ所調査)では, 全点で越冬を確認, 越冬成虫は6.6頭/m²であった。昨年(11地点×2ヶ所の調査では5地点で越冬を確認, 越冬成虫数は0.41頭/m²)と比べて越冬密度は高かった。

(3) 2月28日発表の1か月予報では, 天気は数日の周期で変わるが, 平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く, 降水量は平年並または多く, また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

II. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が10.0%、発病度が0.9であり、ほぼ平年(7.0%, 0.1)並の発生である。
- (2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に、下葉には丁寧に散布する。
- (5) 病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので、発生を認めたら散布間隔を短縮して、集中的に薬剤散布を行なう。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が23.4%、発病度が3.6)。
- (2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が25.4%、発病度が4.8)。
- (2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20～25℃の比較的低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 肥料切れは病勢の進展を助長するので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。

(5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が50.0%であり、平年(46.3%)並の発生であるが、寄生葉率は0.9%であり、平年(5.0%)よりやや低めの発生である。なお、優占種はタバココナジラミである。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が4.0%、発病果率が0.2%)。

(2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。

(3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が11.7%、発病葉率が0.4%)。

(2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が71.4%、発病葉率が4.4%であり、ほぼ平年(62.7%、9.9%)並の発生である。
- (2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が25℃くらいで多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤が下葉の葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.7%、寄生葉率が0.05%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年より多く(前年並)、発生程度は「中～多」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が85.7%、寄生葉率が15.0%であり、平年(22.3%、2.6%)より高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう、丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が17.7%、寄生葉率が1.3%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が2.0%、寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が66.7%、発病葉率が7.1%であり、ほぼ平年(66.3%、12.5%)並の発生である。

(2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 罹病葉は圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(3) 同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が22.2%、発病果率が0.6%であり、ほぼ平年(5.0%、0.1%)並の発生である。

(2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。

(3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(4) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

(5) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が22.2%、発病葉率が17.4%であり、ほぼ平年(61.3%、12.8%)並の発生である。

(2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見

込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行なう。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が11.1%であり、平年(1.7%)よりやや低めの発生であるが、寄生葉率は0.3%であり、平年(0.3%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.7%、寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので、薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が55.6%、寄生葉率が5.3%であり、平年(11.9%、1.7%)よりやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

冬春ホウレンソウ

べと病

1) 予報の内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が12.5%、発病度が3.3)。
- (2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 品種は、本病レース 1～7 に抵抗性があるものを利用する。
- (2) 葉が繁茂すると被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (3) 春先の病勢の伸展を抑制するため、薬剤は予防的に用いる。
- (4) 薬剤は予防的に、また下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。
- (5) 罹病株を圃場に放置すると、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。また、春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているため、速やかに処分する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が33.6%、発生程度指数が3.1)。
- (2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているため、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が11.8%、発病果率が0.6%)。
- (2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が7.1%、発病葉率が0.2%、発病果率が0%であり、平年(3.0%、0.1%、0.3%)並の発生である。
- (2) 2月28日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて晴れの日が少ないと見込まれている。気温は平年並または低く、降水量は平年並または多く、また日照時間は平年並または少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

- (3)罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (4)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並),発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が28.6%,寄生株率が4.3%であり、平年(18.9%, 2.0%)と比べてやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並),発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が64.3%,寄生葉率が9.8%であり、平年(47.6%, 6.6%)と比べてやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

Ⅲ. その他

- 1. 施設栽培において暖房機の最低気温の設定値を下げ過ぎると、低温性病害の発生を著しく助長する恐れがありますので、ご注意ください。
- 2. 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないようにして下さい。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所

U R L : <http://www.pref.tokushima.jp/t-taftsc/boujoshou/>

○ 病害虫の発生予察情報,発生状況,防除法等をお知らせしています。